

福島県立医科大学々報

目 次

○ 学 事	-----	
平成23年5月6日入学式学長式辞	2
平成23年度入学者数	3
平成22年度医学博士授与者（前期・後期）	3
○ 人 事	-----	
役員・副学長・新任教授・新任准教授・新任講師・新任部長等・新任課長等	5
新任あいさつ	5
・副学長（業務担当、特命教授）兼放射線医学県民健康管理センター長 山下 俊一		
・副学長（業務担当） 神谷 研二		
・理事（経営・渉外担当） 梅津 茂己		
・会津医療センター準備室（東洋医学） 教授 三瀧 忠道		
・会津医療センター準備室（耳鼻咽喉科） 教授 小川 洋		
・医学部附属医療制度研究センター 特命教授 向本 時夫		
・医学部整形外科学講座 教授 矢吹 省司		
・副病院長兼看護部長 中嶋由美子		
・医学部救急医療学講座 教授 田勢長一郎		
・医学部臓器再生外科学講座 教授 鈴木 弘行		
○ 諸 規 程 改 正	-----	
平成23年2月から平成23年7月までの主な諸規程の制定改廃関係	9
○ 役員会・経営審議会・教育研究審議会・医学部教授会・看護学部教授会	-----	
役員会	10
経営審議会	10
教育研究審議会	10
医学部教授会	11
看護学部教授会	11
○ 雑 報	-----	
学生の部活動報告（バドミントン部）	11
ふくしま復興支援オリジナルTシャツ	11
震災後の支援に対するお礼	12
震災後の本学の活動（災害医療支援機関としての動き）	12

学 事

■平成23年5月6日 福島県立医科大学 入学式

学長式辞

福島県立医科大学長 菊地 臣 一

3月11日に発生した東日本大震災は、我が国に歴史上例をみない被害をもたらしました。本県での原子力発電所の事故は、現代科学が直面した初めての危機です。このような混沌とした状況の下で、人生の節目である入学式を挙行することは今までになかったことですし、今後もないでしょう。それだけに、今年の入学式は、本学の歴史に長く刻まれるに違いありません。何故なら、本学は、今、歴史という後世の評価と対峙することを求められているからです。今というこの時期、我々に求められているのは、国民や県民の健康管理に政府の支援の下、オールジャパンで全力を尽くすことです。本学は、その最前線で汗を流さなければなりません。そして、次の世代の為に、全世界に向けて、全てを正確に記録し、新たな指針作りの資料を整えることです。

本日、福島県立医科大学大学院及び大学に入学を許可されました皆さん、誠におめでとうございませぬ。入学するかどうか随分悩まれたであろうことは想像に難くありません。それだけに、教職員一同、皆さんの入学を心から歓迎いたします。先人の叡智は、困難に直面した時、それを「悪いこと」とは嘆かず、「自らを鍛える良い機会」と捉えて、その困難と闘うことの大切さを説いています。皆さんは、今、先人の箴言に従ってここに居るのだと、私は確信しています。

私たち教職員は、君達が本学で学ぶという決意が間違っていなかったことを明らかにするために、あらゆる面で応援することを約束します。

また、ここに至った道のりを温かく見守り、励まし、導いてこられた保護者の皆様や先生方には、お子様や教え子の晴れ姿を前に、このような緊迫した状況の下だけに、これまでの歩みを振り返り、万感胸に迫るものがあるかとお察し致します。

入学式とは「未来への覚悟」を表明する場です。今日、新たな一歩を踏み出した皆さん、本学での出会いを大切にしてください。人生は出会いに尽きます。何故なら、“人生の扉は他人が開く”からです。どの出会いが自分にとって大切かはその時は分かりませぬ。だからこそ、一人一人の出会いに真摯に向き合うことが大切です。出会いは自分を成長させ、そして人生を豊かにしてくれます。「出会い」に運命的な出会いなどというものはなく、出会った後に、

お互いが相手に信頼と敬意を持って接する長い日々の営みの積み重ねが絆をつくり、その結果が「掛け替えのない友や恩師」を作っていくのです。

皆さんが医療人として向き合う相手は、理不尽にも突然の病に苦悩している人々です。不条理と矛盾に満ちた医療や看護の現場において、プロとしての医療人に求められるのは、共感の提示と病める人々を包容できる全人的な豊かさです。医療人として求められるプロフェッショナルリズムとは、まず、目的に対する単純強固な意志です。第二に、低い水準における満足感の拒否です。第三に、栄光の影の骨身を削る努力です。最後に、自らの努力無くして人生の果実を期待しないことです。このプロの精神を、これからの日々、胸に刻んで学生生活を送って下さい。今日からは、君達は「何になったか」ではなく「何をしたか」が問われるのです。

学びの日々の中で、君達はこれから様々な挫折を味わう筈です。でも、恐れたり怯むことはありません。人間は、皆失敗しながら生きているのです。そのうえ、もっと酷い失敗も起こります。そして、幾ばくかの苦悩や喪失を日々繰り返しているのです。でも、皆自分なりのベストを尽くして生きているというのが世の中です。大切なことは、日々遭遇する、目の前の一つ一つに逃げずに愚直に向き合うことです。日々のひた向きな生き方の積み重ねが、その後の自分を形づくっていくのです。「挫折の数だけ勁く、そして優しくなれる」ことを信じて研鑽に励んで下さい。

人間というものは、人生が配ってくれたカードでやっていくもので、配られたカードが悪いと愚痴をこぼしたりするものではありません。人生こうしようああしよう計画を立てて、自分の人生を考えても、その通りになることはありません。殆ど違った方向へ行ってしまうのです。でも、大切なことは、その場その場で自分のベストを尽くすことです。

私の医師としての長い経験から、世の中には変わるものも多いが、変わらないものも少なくない、というのが実感です。その中から皆さんに三つの言葉を贈ります。一つは、「愚直なる継続」です。これを実行するには鉄のような意志が必要です。何でもよいですから、毎日継続できるものを決めて取り組んでみてください。毎日五分間、本を開くことでも結構です。大切なのは、本を読み理解することではなく、開くだけでよいのです。その積み重ねを三年間続けると、もはや誰も到達できない境地に達することが出来ます。プロとしての医療人にとっては、愚直なる継続が最大の武器であり、大成する王道です。

もう一つは「修業とは矛盾に耐えること」です。それに耐えられなければ医療のプロとして一人前にはなれません。「修業」の場では多少の矛盾や不条理に耐えていくことが求められます。修業や人生とは、「さまざまな厄介ごとの中を、折り合いをつけて生き抜いていく場」という認識と覚悟を持つことです。先輩や教師は、君達がひたむきに努

力している姿をみると、君達を愛しく思い、教育ももうという熱意を持てるのです。双方の熱意がぶつかり合っ初めて、「人生の扉は他人が開く」という格言が皆さんの前に表れるのです。

最後に、「誇り」です。誇りは、人生の道々で出会うであろう様々な苦難に立ち向かうとき、自分を支えてくれる最大、そして唯一の拠り所になります。頭を下げないことが「誇り」ではなく、頭を下げた後に残るのが真の「誇り」です。誇りは、人生の道々で出会うであろう様々な苦難に立ち向かうとき、自分を支えてくれる最大の心の拠り所になります。

君達がこれから身につける白衣は、着る者に小さな覚悟を強めます。白衣は君達に誇りを持つこと、そして厳しさに耐えることを求めています。

福島県立医科大学は、母体となった福島県立女子医学専門学校が創立されて以来、六十有余年の歴史があります。そして今、原発事故に対して国民や県民の健康を守っていくという新たな歴史的使命を負うことになりました。君達の、そして福島県立医科大学の歴史に新たなページを書き足すのは、今ここに居る君達自身なのです。我が国における未曾有な惨禍を受け止めて、君達がどのようなページを書き足すのか、私たちは今から期待しております。無限の可能性を秘めた君達の、今後の成長を期待しています。

■ 平成23年度福島県立医科大学入学者数

① 医学部新入生110名

	男	女	計
県内	26名	22名	48名
県外	40名	22名	62名
計	66名	44名	110名

② 看護学部新入生86名（うち3年次編入生4名）

※（ ）内書きは編入生

	男	女	計
県内	8名（1名）	57名（3名）	65名（4名）
県外	1名（0名）	20名（0名）	21名（0名）
計	9名（1名）	77名（3名）	86名（4名）

③ 大学院新入生51名

	男	女	計
医学研究科（博士）	23名	7名	30名
医学研究科（修士）	5名	2名	7名
看護学研究科（修士）	5名	9名	14名
計	33名	18名	51名

■ 平成22年度医学博士授与者

前期〔平成22年9月授与〕

氏名	学位論文名
赤津 賢彦	Transfer of the intravenous anesthetic, propofol, to the harvesting bone marrow fluid in bone marrow donors (骨髄ドナーの採取骨髄液中への静脈麻酔薬プロポフォールの移行)
西山 浩	高腹膜転移卵巣癌細胞株における増殖因子 Heregulin-1 α と関連受容体の発現と抗受容体抗体による増殖抑制の検討
三浦 至	Effects of aripiprazole and the Taq1A polymorphism in the dopamine D2 receptor gene on the clinical response and plasma monoamine metabolism during the acute phase of schizophrenia (統合失調症急性期におけるアリピラゾール治療反応性と血漿モノアミン代謝産物濃度、ドパミン D2 受容体 Taq1A 遺伝子多型との関連)
松岡 俊光	ヒト前立腺平滑筋に対するエンドセリンの神経伝達促進効果について
今村 孝	新生児における臍帯血単核球のグルココルチコイドレセプターの発現とコルチゾール濃度に関する検討
松本 歩美	The trend of the prevalence of resistant Streptococcus pneumoniae and Haemophilus influenzae during the promotion of appropriate antibiotic use for children with respiratory infection (小児気道感染症に対する抗菌薬適正使用推進下における肺炎球菌およびインフルエンザ菌薬剤耐性化の動向)
石田 卓	気管支鏡による肺末梢小型病変の精密診断法 - 仮想内視鏡ナビゲーションと気管支腔内超音波法の導入 -

後期〔平成23年3月授与〕

氏名	学位論文名
吉田 勝浩	A validation study of the Brief Scale for Psychiatric problems in Orthopaedic Patients (BS-POP) for chronic low back pain patients (慢性腰痛患者における Brief Scale for Psychiatric problems in Orthopaedic Patients (BS-POP) の計量心理学的検証)

今泉 光雅	Potential of Induced Pluripotent Stem (iPS) Cells for the Regeneration of the Tracheal Wall (iPS細胞を用いた気管壁再生に関する研究)	箱崎 貴大	Effects of a CB1 cannabinoid receptor antagonist on nitrous oxide-induced antinociception and acute tolerance in rats (ラットにおける亜酸化窒素の鎮痛効果と急性耐性に及ぼすカンナビノイド受容体拮抗薬の効果)
Alain Mayindu Ngoma	CD4 ⁺ CD25 ^{high} FOXP3 ⁺ Regulatory T cells recovery after allogeneic stem cell transplantation (同種造血幹細胞移植後のCD4 ⁺ CD25 ^{high} FOXP3 ⁺ 制御性T細胞の動態)	草野 裕樹	ピオグリタゾン食塩感受性高血圧 Dahl ラットにおいて酸化ストレスと尿細管の老化を抑制する
川井 巧	Hospital admissions due to lower respiratory tract and gastrointestinal infections among mature babies in Fukushima City, Japan (福島市での成熟児における下気道感染症と消化器感染症による入院)	齋藤 国治	滲出型加齢黄斑変性の病型別頻度と臨床所見の推移
土屋 令雄	ラット肺における Porphyromonas gingivalis の静脈内侵入による血栓形成	大関 健治	メタボローム解析を用いた妊娠高血圧症候群妊婦における代謝特性の検討
石井 士朗	Causes of photopenic defects in the lower sternum on bone scintigraphy-correlation with MDCT (骨シンチグラフィで認められる胸骨下部の集積低下の原因に関する MDCT を用いた検討)	瀬戸 夕輝	Effects of remifentanil on target coronary artery motion during off-pump coronary artery bypass surgery (心拍動下冠動脈バイパス術における remifentanil の心表面運動に対する影響の検討)
齋藤 敬弘	Reversal of Diabetes by Creation of Neo-islet Tissues into a Subcutaneous Site Using Islet Cell Sheets (膵島細胞シートを用いた皮下への新たな膵島組織構築による糖尿病の改善)	黒澤 博之	Effects of phenylephrine and noradrenalin on the target coronary artery motion during off-pump coronary artery bypass surgery (心拍動下冠動脈バイパス術中の心表面運動に対するフェニレフリンおよびノルアドレナリンの影響)
金子 哲治	ヒト口腔扁平上皮癌細胞における Liver X Receptor の発現とそのアゴニストによる増殖抑制効果	喜古雄一郎	EBV 陽性乳癌の臨床病理学的研究 - EBV 陽性乳癌の発現頻度と予後因子との関連 -
宮本康太郎	GIST (Gastrointestinal stromal tumor) におけるカテプシン L の発現解析	國分 周子	部分閉塞膀胱における除神経と膀胱平滑筋の収縮障害 - シクロヘキセノン誘導体 (TAC-302) の除神経予防効果 -
宮嶋 正之	Leukoaraiosis が、画像解析ソフト VSRAD を用いたアルツハイマー病患者の内側側頭葉部萎縮の評価に及ぼす影響	小川総一郎	ウサギ前立腺におけるノルアドレナリン放出量、一酸化窒素放出量および収縮反応の加齢による変化
鳴原 武志	肺腫瘍に対する CT ガイド下針生検の合併症頻度と診断精度、および気胸のリスクファクターに関する検討	大和田一範	Genetical, Histological, and Clinical Characteristics of IgA-Negative Mesangioproliferative Glomerulopathy (非 IgA 沈着メサンギウム増殖性腎症の遺伝学的、組織学的、臨床的特徴)
谷田部 緑	ラットの腎臓における食塩負荷によるカルシウム再吸収機構の変化および Na ⁺ /Ca ²⁺ 交換輸送体 1 の特異的阻害薬 SEA0400 の作用	正保美和子	統合失調症治療薬による代謝異常副作用のモデル動物の構築と検証に関する研究
大口 泰治	サイトメガロウイルス AD169 株の網膜色素上皮細胞での増殖初期過程の解析	西山 学即	ゾウリムシ <i>Paramecium caudatum</i> ゲノムの再編成に関する研究: <i>hb-nap-1</i> とその周辺領域の再編成と生物学的意義
志賀 哲也	ミスマッチ陰性電位が反映する自動的探知機構における逸脱音の情報処理様式の研究	待井 宏文	Aging impairs myocardium-induced dilation in coronary arterioles: role of hydrogen peroxide and angiotensin in rat (ラット加齢心における代謝性冠血流調節機構破綻機序の解明; 過酸化水素及びアンジオテンシンの役割を通じて)
笠原 諭	WAIS-R に反映されるトップレベルラグビー選手の空間認識能力		
三浦 祥恵	統合失調症患者の音声情動認知に関する考察 - 認知機能との関連について -		

人 事

(平成23年8月1日現在)

◎役員

H23.4.1 理事（運営・渉外担当） 梅津 茂己

◎副学長

H23.7.15 副学長（業務担当） 山下 俊一

H23.7.15 副学長（業務担当） 神谷 研二

◎新任教授

昇任 H23.3.1 救急医療学講座 田勢長一郎

昇任 H23.3.1 臓器再生外科学講座 鈴木 弘行

採用 H23.5.1 会津医療センター準備室 三瀧 忠道

昇任 H23.6.1 会津医療センター準備室 小川 洋

採用 H23.7.1 附属医療制度研究センター 向本 時夫

昇任 H23.7.1 整形外科学講座 矢吹 省司

◎新任准教授

採用 H23.3.1 自然科学講座 五十嵐城太郎

採用 H23.4.1 会津医療センター準備室 角田 三郎

昇任 H23.4.1 会津医療センター準備室 田中 学

採用 H23.4.1 基礎看護学部門 佐藤 美子

採用 H23.4.1 療養支援看護学部門 坂本 祐子

昇任 H23.4.1 地域・在宅看護学部門 高瀬 佳苗

昇任 H23.5.1 皮膚科学講座 大塚 幹夫

採用 H23.7.16 会津医療センター準備室 荻原 健英

◎新任講師

採用 H23.4.1 先端医療研究推進・支援センター 稲野 彰洋

採用 H23.4.1 母性看護学・助産学部門 渡邊 一代

昇任 H23.4.1 療養支援看護学部門 飯塚 麻紀

昇任 H23.4.1 家族看護学部門 古溝 陽子

採用 H23.5.1 会津医療センター準備室 澁川 悟朗

昇任 H23.5.1 神経内科学講座 望月 仁志

昇任 H23.5.1 心臓血管外科学講座 若松 大樹

昇任 H23.5.1 整形外科学講座 関口 美穂

昇任 H23.5.1 形成外科学講座 大河内真之

昇任 H23.5.1 小児科学講座 佐野 秀樹

昇任 H23.5.1 小児科学講座 佐藤 晶論

昇任 H23.5.1 小児科学講座 陶山 和秀

昇任 H23.5.1 眼科学講座 丸子 一朗

昇任 H23.5.1 耳鼻咽喉科学講座 横山 秀二

昇任 H23.5.1 病理病態診断学講座 鈴木 理

昇任 H23.6.1 皮膚科学講座 佐藤 正隆

昇任 H23.6.1 自然科学講座 西山 学即

◎新任部長等

昇任 H23.4.1 看護部長 中嶋由美子

昇任 H23.4.1 看護副部長（総務担当） 佐藤 幸子

昇任 H23.4.1 看護副部長（業務担当） 尾形 瑞子

昇任 H23.4.1 看護副部長（業務担当） 目黒 文子

◎新任課長等

転入 H23.6.1 企画財務課長 佐藤 宏隆

転入 H23.6.1 研究推進課長（兼）ふくしま医療-産業

リエゾン推進室長 中村 修二

転入 H23.6.1 病院経営課長 猪俣太一郎

転入 H23.6.1 事務局主幹兼副課長 伊藤 剛

転入 H23.6.1 法人経営室主幹兼副課長 岡崎 拓哉

転入 H23.6.1 研究推進課主幹兼副課長 坂内 健二

転入 H23.6.1 病院経営課主幹兼副課長 黒田 茂

採用 H23.6.1 ふくしま医療-産業リエゾン推進室副室長

大橋 茂信

■ 新任あいさつ



副学長就任ごあいさつ

副学長（業務担当、特命教授）
放射線医学県民健康管理センター長

山下 俊一

松尾芭蕉や若山牧水ではありませんが、人生は旅に例えられます。その生涯は誰も生老死のリスクから逃げることはできません。今回長崎から福島への奇縁を頂き、いにしへの防人とは逆になりますが白河の関を越えて来ました。菊地臣一理事長の『骨は拾うので粉骨碎身被災者の為に尽力するように』との有難い殺し文句で、7月15日正式に長崎大学を休職、派遣されてきました。この間多くの関係者のご高配とご配慮を頂き心から感謝申し上げます。原発震災以降、福島を拠点に東奔西走していますが、ようやく福島市民となりました。

私が尊敬する長崎の鐘で有名な永井隆博士の生き様は、まさに『死は恋い焦がれる花嫁』と終末期まで平和を希求し続けた偉大な大先輩です。原爆被災で潰滅した母校の再建、そして自らも負傷し白血病の床で書き続けた数々の著作は、今ここの福島県立医科大学の宝になるものと確信しています。チェルノブイリの教訓を生かし、国際社会との連携を強化しつつ、福島の復興・再生と全県民の健康管理調査事業に献身する覚悟です。

内憂外患、そして混沌と矛盾は世の常ですが、亡びぬものを目指し真理探究の道を新たな仲間と共に歩みたいと念願しています。その心は、『今日もまた こころの鐘を

打ち鳴らし 打ち鳴らしつつ あこがれてゆく』にあります。すでに医大では素晴らしい出会いを多く頂きましたが、未だ新参者です。何とぞご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



副学長就任のご挨拶

副学長（業務担当）

神谷 研二

平成23年7月15日付けで副学長に就任させて頂きました神谷研二と申します。宜しくお願い申し上げます。私が担当させて頂くのは、この度の原発事故に対する被ばく医療の分野です。簡単に自己紹介をさせて頂くと、私は、昭和52年に広島大学医学部を卒業し、病理系大学院に進学後、米国ウィスコンシン大学で約6年間放射線生物学の研究に従事しました。その後、広島大学原爆放射線医学研究所に勤務し、現在所長を務めています。また、三次被ばく医療機関である同大の緊急被ばく医療推進センター長も併任しています。専門は、放射線障害医学と緊急被ばく医療で、研究では放射線発がんの分子機構解析です。学会活動では、現在、日本放射線影響学会の会長を務めています。

さて、広島大学は、東日本大震災発生の翌日には西日本ブロックの三次被ばく医療機関として、「緊急被ばく医療支援チーム」を派遣し、広島大学に蓄積した被ばく医療の経験や技術を少しでも福島県民の安全や安心に役立てることができる様に活動して参りました。派遣した医療チームは、現在までに38班、延べ人数で1,100名以上になります。

このような活動の中で、本学と広島大学の連携が深まり、平成23年4月2日には教育研究活動における包括協定を締結するに至りました。この度、私が副学長（非常勤）に就任させて頂くことになり、両大学の連携を強化する橋渡しの役割も果たしたいと思っています。実際、両大学が協力して申請した大型の人材育成プログラムであるリーディング大学院プログラムも採択になり、来年度から放射線災害復興を担える人材育成も始まります。

福島県立医大は県民の健康を守る大きな責任を担っておられます。特に、原発事故から全県民202万人の健康を守る「県民健康管理調査」では、本学はその実施機関として大きな役割を果たします。私は、本学の「県民の健康を守る戦い」に加えて戴き、今まで培ってきた全ての力を投入し、少しでも県民や本学のお役に立てる仕事をして参ります。同時に、本学に被ばく医療の国際的な教育研究機関を設立し、当該分野の人材を育成する事業にも積極的に協力して参りたいと考えています。

2つの被爆地にある大学である長崎大学と広島大学が力

を合わせて本学の被ばく医療活動を支援することで、県民の健康を護り、世界の被ばく医療や放射線防護に大きく貢献できることを心より願っています。

何卒宜しくお願い申し上げます。



理事就任ご挨拶

理事（経営・渉外担当）

梅津 茂己

今年4月に経営・渉外担当の理事（非常勤）を拝命しました。前平子理事同様よろしくお願い致します。私の前職は、東邦銀行で、企業の相談対応・公務・産学官連携・ビジネスマッチング・信託業務等を本部で長くやってまいりました。法人化された福島県立医科大学で、今までの経験を活かさればと思っております。

さて、経営担当理事の役割は、まず、しっかりした財務体質・組織を作っていくことと考えており、その為に汗を流す覚悟です。しかし、大学の中で「利益」という言葉を使うと、まるで悪いことをするように思われるのが不思議でなりません。確かに、利益至上主義は問題ですが、ご利益（ごりやく）は、公立大学といえども、必要かと思えます。二宮尊徳も、「道徳なき経済は罪悪である。経済なき道徳は寝言である。」と、モラルに裏打ちされた経済の必要性を語っています。

もう1つ理事として目を向けたいのが、職員の方と一緒にスキル向上を目指すことです。優秀な職員は、優秀な医師と同じくらい優れた病院には欠かすことができないと考えるからです。また、就任当初より「使って頂ける理事になりたい」と挨拶のたびに言っていました。半年経過した現在、その気持ちはさらに強くなってきました。ですから自分の存在意義がなくなったときは、任期途中でも退任の時期と決めて頑張りますので、よろしくお願いいたします。



教授就任ごあいさつ

会津医療センター準備室（東洋医学）

教授 三 瀧 忠 道

平成23年5月1日付にて会津医療センター（東洋医学）教授を拝命しました。現在は県立会津総合病院漢方内科において臨床に携わりつつ、センター開設に向けて準備をしております。

平成14年、医学部コア・カリキュラムに「和漢薬を概説できる」と記載されて、全国80医学部で東洋医学の教育が開始されました。しかし漢方薬本来の生薬を用い、漢方医学的な方法論に則り、外来から病棟まで漢方診療を実践している大学は未だ稀です。それにも拘らず、漢方エキス製剤の限られた品目のみを用いても、多くの臨床成果が報告されて参りましたが、大学における臨床活動としては甚だ不十分であります。私は千葉大学卒後4年間の内科研修の後、地域基幹病院の漢方診療部門で約30年間、病棟で生薬も用いた臨床活動に当たって参りました。その経験から、難治性疾患や重症患者に対し、あるいは総合診療において、漢方は現代医療にさらなる格段の貢献が出来得ると確信しております。

センターでは、漢方薬だけではなく鍼灸も含めた本格的な東洋医学の臨床実践体制を築く所存です。また東洋医学の卒前教育とともに、卒後教育として段階的に、わが国の臨床医が知っておくべき基礎的な部分、総合診療医として身につけておくべき技能、専門医のためのトレーニング、さらに全国の大学の教官育成を目指します。真の東洋医学と西洋医学を融和した新たな医療体系構築を目指しますので、ご指導ご鞭撻賜りますようによりしくお願い申し上げます。



教授就任にあたって

会津医療センター準備室（耳鼻咽喉科）
教授 小川 洋

本年6月に着任いたしました耳鼻咽喉科の小川でございます。教授着任にあたって御挨拶申し上げます。私は昭和62年福島県立医科大学を卒業し、福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座に直ちに入室いたしました。その後福島県立医科大学附属病院、関連病院で研修を行い、平成6年3月からは福島県立医科大学に在職しておりました。その間、耳鼻咽喉科領域の中でも耳科領域、鼻科領域に力を注ぎました。会津医療センター（仮称）の設立にあたり、県立会津総合病院での診療に従事し4か月が経過しましたが、この間当院における耳鼻咽喉科の位置づけ、問題点について自分なりに分析してまいりました。高齢者が予想以上に多いこと、それぞれの患者が多く合併症を抱えていること、患者をとりまく環境が単純ではないこと、当院における耳鼻咽喉科領域患者が少ないこと、色々な問題点がわかってまいりました。二つの県立病院が統合され、福島県立医科大学の附属病院となることに関してさまざまな議論がなされ、二年後には新しい医療機関の誕生を迎えるわけ

ですが、理想とする医療機関を作り上げていくためには沢山のハードルがあることを痛感しています。さまざまな領域の方々と協力しながら、患者のために理想的な病院であること、そこで働く職員がその責任を果たせるような病院であることを目指し耳鼻咽喉科の立場から新たな医療機関の立ち上げに尽力したいと思っております。



就任のご挨拶

医学部附属医療制度研究センター
特命教授 向本時夫

平成23年7月1日付けで、医療制度研究センター特命教授を拝命致しました。当センターは、本年7月1日で医学部の附属機関として設置され、医療保険制度の研究・教育を実施していくこととされております。

このような機関は全国初めてのことであり、私自身その重責に身が引き締まる思いです。

具体的にどのようなことを行っていくかですが、基本は学生の皆さんに医療保険制度についてお話をし、当大学卒業生が医療保険の世界で決して間違いを起こすことのないよう導く。しかし、簡単ではないことは私自身感じております。

何故なら、医学部の皆さんは、大学に在籍する間は医療の手技や医療に関する知識を習得するため全力で頑張っておられ、時間的制約もある。また、医療保険制度の知識の必要性を感じるのは、自らが診療を行い保険請求するようになってからであるからです。

これまで我が国では、一部の大学において公衆衛生の講座や医療情報学講座で盛り込んでいるところはありますが、当大学のような形で作られているところはありません。

学生の皆さんが、どのように感じ受け入れてくれるのか不安であります。当センターを設置された意向に添うべく全力で取り組んで参る所存です。

皆様には、何卒ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

なお、兼務として医療情報部長も拝命しております。こちらでも、いろいろとお世話になると思いますが、何卒よろしくお願い致します。



教授就任のご挨拶

医学部整形外科学講座
教授 矢吹 省司

平成23年7月1日付けで整形外科学講座の教授を拝命致しました。私は、昭和62年に本学を卒業後、整形外科に入局しました。1年の大学研修後、関連病院で整形外科全般の研修を積み、1993年から1年間SwedenのGothenburg大学で、また1997年から約5ヶ月間California大学San Diego校で、痛みに関する研究を志しました。その後大学で主に脊椎脊髄疾患の基礎と臨床を行ってきました。2007年からは附属病院リハビリテーションセンターの部長としてリハビリテーションセンターの立ち上げに参画させていただきました。現在は、整形外科とリハビリテーションセンターの仕事をさせていただいております。

私の抱負を述べさせていただきます。1. 教育に関して：医師であればそれだけで尊敬されるという時代は終わりました。整形外科やリハビリテーションという視点で、患者の全体像をどのように把握し、診断・治療していくのかを理解してもらい、実践できる医師となれるような教育に努めたいと思います。2. 研究に関して：痛みの客観的評価法の確立、脊椎内視鏡手術の手技の改良・発展、痛みや機能障害に対する有効なリハビリテーション（運動療法）の確立、を進めます。3. 診療に関して：患者中心の診療を実践し、患者から信頼される福島県立医科大学附属病院であり続けるよう精一杯努力していきます。

福島県は、地震、津波だけでなく、原発事故という大きな負の遺産を抱えることになりました。身体的・精神的苦痛を背負った県民に少しでも役に立てるよう精進することを誓って、ご挨拶とさせていただきます。



就任のごあいさつ

副病院長兼看護部長
中 嶋 由美子

3月11日の東日本大震災後、原発に対する不安や様々な状況が不透明なこの時期に看護部長に就きました。新採用者の一人の辞退もなく4月1日に辞令交付ができたことは、一番最初で素晴らしいことでした。

私たちは、看護部の理念にある県民の健康を守るため、質の高い看護を提供しなければなりません。そのためには、人材の確保そして教育が重要になります。福島県の置かれ

ている環境は、大変厳しく、看護職員は、多くの不安を抱えながら看護をしています。働き続けられる環境の整備が重要になっており、今一番に取り組むことと考えています。具体的には、多職種との業務分担や協働、病院内のルール作りなど看護師が看護に専念できるような体制作り、精神的バックアップなど労働環境の改善をしていく必要があります。また、看護学部の学生がこの病院で「看護をしたい」と思えるような実習環境を整えることをしていかなければと考えています。

日々変化していく医療に対応できる看護師の育成については、倫理感を高めるとともに知識・技術の向上を図っています。看護部の年間教育計画においては、企画・運営に対して看護学部の教員の協力をいただいております。看護学部との連携を密にし、経験を知識に変え、考えられる看護師を育て患者さんが満足される看護の提供をしていきたいと思っております。また、働く看護師においては、やりがいのある看護ができるようになってほしいと期待をしています。

以前のような自然豊かな福島に、心豊かな福島県民に戻れるよう願うとともに、看護師が、温かい笑顔で看護できるよう努めていきたいと思っております。



教授就任ごあいさつ

医学部救急医療学講座
教授 田 勢 長一郎

平成23年3月1日に新設された救急医療学講座の教授として就任いたしました。昭和51年3月本学医学部を卒業後、麻酔科および集中治療部において急性期管理を研修し、国内およびカナダや米国、欧州での救急医療ならびに救急医療体制も学ぶことができました。救急医療学講座の役割は、平成20年1月28日に開設された救命救急センターでの重症疾患に対して、各科との協力体制で高度で集学的な治療を行うことに加え、人材確保および育成、それを裏付ける研究体制による高い診療レベルの確立です。さらに、県内救急医療システムの整備を含めた県内救急医療の質の向上をはかり、救命率を向上させることも重要な役割です。平成12年には県消防防災ヘリを利用して医師を現場へ投入するドクターヘリ体制を確立し、救命救急センター開設と同時に専用のドクターヘリを導入いたしました。平成23年3月31日(1,100日)の時点で1,015件の出動回数があります。災害に関しても、救命救急センターを中心にDMAT2チームを有しており、今回の東日本大震災では、外来・病棟で傷病者、避難者の対応にあたり、一方では、初日より県災害対策本部へ救急専門医師を派遣して県統括DMATを立ち上げ、DMAT参集拠点病院、ドクターヘリ(9機)参集基

地病院として活動しました。さらに、放射線科とともに『緊急被ばく医療施設』を立ち上げ、重症外傷に加えあらゆる被ばく・汚染傷病者に対して対応できる体制を維持しております。また、県災害対策医療アドバイザーや政府原子力災害現地対策本部厚労省医療アドバイザーとしての役割も担い、原発事故の早期の収束を願い作業員の安全確保にいくらかでも貢献できれば幸いです。教育では全国でも早期に救急医療の標準化に取り組み、緊急心血管治療や外傷の初療では、専従医師、研修医、看護師が共通言語で治療にあたっております。



教授就任ご挨拶

医学部臓器再生外科学講座
教授 鈴木 弘行

平成23年3月1日付けで臓器再生外科学講座、教授を拝命いたしました。これまで、附属病院呼吸器外科部長として肺がん手術を中心として、胸部疾患の診断、治療に従事して参りましたが、この度、さらに本学の教授職を拝命するにあたりその責任の重さにあらためて身が引き締まる思いでございます。私は本県に生まれ育ち、平成2年（1990年）に本学を卒業し、現在に至るまで、まさに本学と本県に育てて頂きましたが、これからはそのご恩に報いる時であると考えております。

私に与えられた使命のなかで、最も重要な責務として、外科医の教育があります。近年、若手医師の外科離れが叫ばれる中、いかに外科の魅力を伝え、心と技術を兼ね備えた多くの外科医を育て、世に送り出すことができるか、について腐心して参りたいと考えております。外科医というもの、ややもすれば、技術にばかり目を捉われてしまいがちですが、外科医である前に医師であり、その前に一人の社会人として自律した人間でなくてはならないということの後輩たちにしっかりと伝えていきたいと考えております。心のないところに本物の技術は備わることはありません。

震災以来、本学は多くの苦難に直面しつつも皆で力を合わせ多くの厳しい局面を乗り切って参りました。本学のさらなる発展のために微力ながら、力を尽くすことができれば幸いです。今後もこれまで以上に厳しいご指導をお願い申し上げます。

諸規程改正

■ 平成23年2月から平成23年7月までの主な諸規程の制定改廃関係

○「福島県立医科大学大学院奨学金要綱」の制定

（平成23年2月2日制定・平成23年4月1日施行）

本学大学院医学研究科または、看護学研究科に在籍する者で、学業、人物ともに優れ、且つ、(独)日本学生支援機構が募集する大学院生対象の奨学金を申請し受給できなかった者を対象にした奨学金制度を設立しました。

○「公立大学法人福島県立医科大学組織及び運営規程」の一部改正

（平成23年2月1日制定・平成23年2月1日施行）

本学における地域の産学官関係団体等のネットワーク形成、連携による研究開発等の推進を図り、地域産業の進行及び地域の活性化に寄与することを目的に、法人直轄の組織として、新たに「産学官共同研究センター」を新設しました。

○「公立大学法人福島県立医科大学副理事長及び理事の任期に関する規程」の一部改正

（平成23年3月1日制定・平成23年3月1日施行）

「2年」としてきた副理事長及び理事の任期を「2年（その任期の末日が理事長の任期の末日以後となる場合は、理事長の任期の末日まで）」と改めました。

○「公立大学法人福島県立医科大学諸料金規程」の一部改正

（平成23年4月1日制定・平成23年4月1日施行）

インプラント義歯に関する料金の改定、相互貸借によるカラー文献複写料金、病児病後児保育所利用料金、教務に係る各種証明発行手数料を新たに決めました。

○「公立大学法人福島県立医科大学職員給与規程」の一部改正

（平成23年4月1日制定・平成23年4月1日施行）

通勤手当の額の引き上げ、期末・勤勉手当の支給割合の引き下げが行われました。

○「公立大学法人福島県立医科大学職員特殊勤務手当細則」の一部改正

（平成23年4月1日制定・平成23年4月1日施行）

附属病院の診療等業務において、臨床研修医を指導する業務に従事する職員に対して、1月につき10,000円を支給する「臨床研修医指導手当」を新設しました。

○「公立大学法人福島県立医科大学ハラスメント防止規程」の一部改正

（平成23年4月1日制定・平成23年4月1日施行）

ハラスメントの定義を見直しました。また、対策委員会の委員に神経精神医学の分野に関する学内有識者を加

え、ハラスメントに関する相談体制を見直しました。

○「公立大学法人福島県立医科大学組織及び運営規程」の一部改正

(平成23年4月1日制定・平成23年4月1日施行)

法人組織として「研究推進戦略室」を、大学組織として「先端医療研究推進・支援センター」を新設しました。看護学部の部門を再編成しました。附属病院の内部組織として、「人工透析センター」及び「栄養管理部」を新設しました。事務局に「病児病後児保育所」を新設しました。事務局企画財務課を再編し「研究推進課」を新設するとともに、「ふくしま医療-産業リエゾン推進室」を研究推進課の課内に移行しました。

○「福島県立医科大学大学院生に係る授業料の免除に関する内規」の制定

(平成23年4月20日制定・平成23年4月20日施行)

大学院一般学生に係る生活困窮を理由とする授業料免除の取扱を「福島県立医科大学授業料等の免除等に関する内規」とは別に定め、授業料免除の家計の判定を、国立学校における「授業料免除選考基準の運用について」の家計基準に準じて決めました。

○「公立大学法人福島県立医科大学理事長付特命教員就業規則」の制定

(平成23年3月30日制定・平成23年3月30日施行)

理事長の命を受け、高度な専門知識経験若しくは優れた見識を一定期間活用して遂行する業務を推進する上で欠くことの出来ない非常勤の教員を雇用するために決めました。

○「公立大学法人福島県立医科大学プロジェクト研究員就業規則」の一部改正

(平成23年4月27日制定・平成23年4月27日施行)

理事長の命を受け、高度な専門知識経験若しくは優れた見識を一定期間活用して遂行することが必要な業務を推進するための人材としてプロジェクト教員を採用する場合の採用手続きを定めました。

○「公立大学法人福島県立医科大学研究支援事業実施要綱」の制定

(平成23年6月1日制定・平成23年6月1日施行)

本学の新たな研究の芽を育て、地域や世界に貢献できる人材を育成するため、「研究支援事業」を実施することとしました。

○「公立大学法人福島県立医科大学組織及び運営規程」の一部改正

(平成23年6月1日制定・平成23年6月1日施行)

東日本大震災及び原発事故後の県民の健康管理への対応のため、副学長を複数制にし、幅広い放射線医学全般を分担して担当する「副学長（業務担当）」を設置しました。

○「公立大学法人福島県立医科大学組織及び運営規程」の一部改正

(平成23年4月1日制定・平成23年4月1日施行)

医療制度の調査、研究及び教育に関する医学部の附属施設として「医療制度研究センター」を設置しました。

役員会・経営審議会・ 教育研究審議会・医学部 教授会・看護学部教授会

■ 役員会

【平成23年7月27日 第4回役員会】

- 副学長（業務担当）の就任について

次のとおり、副学長が就任した旨報告があった。

（副学長就任者）

山下俊一（医科大学特命教授・常勤）

神谷研二（理事長付特命教授・非常勤）

任期は、平成23年7月15日から平成24年3月31日まで

■ 経営審議会

【平成23年6月24日 第1回経営審議会】

- 公立大学法人福島県立医科大学諸料金規程の一部改正について

公立大学法人福島県立医科大学諸料金規程の一部改正が承認された。

- 平成22年度決算について

平成22年度決算が承認された。

■ 教育研究審議会

【平成23年6月24日 第1回教育研究審議会】

- 学生の懲戒処分に関する規程の一部改正について

「本規程による懲戒処分の対象となる学生の「定義」として、「学部学生及び大学院学生とする」と定義するとともに、本学の大学学則において、身分等に関する定めがある研究生等へも本規程を準用する等の改正」について審議され、原案のとおり承認された。

- 大学院学則の一部改正について

「本研究科は平成22年度に研究科の充実を図るため、科目の見直し等を行ったが、研究科の専門性を充実させていくという形で今回再編成し、必要履修科目のうち、共通必須科目を4科目から3科目にし、その分、看護学・専門科目を履修しなければならないという形で強化する方針を決定する旨の改正」について審議され、原案のとおり承認された。

■ 医学部教授会

【平成23年4月20日 定例教授会】

- 医学部教務委員会委員の選任について
次のとおり選任された。

千葉教授（基礎病理学講座）

紺野教授（整形外科学講座）

藤森教授（産科婦人科学講座）

志村教授（自然科学講座）

任期は、平成25年3月末まで

- 医学部入学試験委員会委員の選任について
次のとおり選任された。

小川教授（循環器・血液内科学講座）

中山教授（腎臓高血圧・糖尿病内分泌代謝内科学講座）

宇川教授（神経内科学講座）

鈴木教授（臓器再生外科学講座）

齋藤教授（脳神経外科学講座）

金光教授（感染制御・臨床検査医学講座）

小林恒夫教授（自然科学講座）

岡田教授（自然科学講座）

任期は、平成25年3月末まで

■ 看護学部教授会

【平成23年2月15日 定例教授会】

- 組換え DNA 実験安全委員会委員の推薦について
生命科学部門の森努准教授が選任され、その後、学長から任命された。

雑 報

■ 学生の部活動報告

バドミントン部

医学部3年 小名木 彰 史

福島県立医科大学3年生、現バドミントン部主将の小名木彰史です。今回は、バドミントン部について紹介させて頂きたいと思います。バドミントン部は男子15名、女子18名の総勢33名で活動しています。ここ数年で入部してくる1年生はどんどん増えていて、部員の顔ぶれはとてもフレッシュです。よく上級生が何歳も下の後輩に対してジェネレーションギャップを感じて嘆いている光景がよく見られます。大学生になって初めてバドミントンを始める人も多く、現在は部員の半数以上が初心者です。上級生が初

者を指導する光景がたくさん見られ、先輩後輩が仲良く練習をしています。上下関係は大切にしつつ、初心者・経験者、先輩・後輩が分け隔てなくいつも和気あいあいと部活に励む光景は、バドミントン部にとっても特徴的な光景で、僕自身がこの部活が好きな理由でもあります。練習に対する部員のモチベーションは高く、最初はラケットを羽に当てることすら出来なかった部員も一年も経てば立派に試合が出来るまで成長します。

毎年行われる北医体、北保体、東医体での勝利を目指して、週に4日体育館で練習しています。今年度の東医体では、男子団体3位・全医体出場という好成績を収めることが出来ました。決して個人個人の力の合計では勝っていたとは言えませんが、団体戦ならではの団結力で、全力で勝ち取った結果だったと思います。震災の影響で満足に練習が出来ない中、北医体では医学部3年生の佐々木敦宏がシングルスでベスト4になるなど、素晴らしい成績を残してくれました。

最後になりましたが、顧問の安村誠司先生をはじめとした、OB・OGの方々、そして福島県立医科大学の皆様のご協力とご支援のおかげで、充実した部活動を行うことが出来ています。この場をお借りしてお礼を述べさせていただきます。今後も部員一同、バドミントン部のさらなる発展のために努力していきます。これからもご支援、ご協力のほどをよろしくお願いします。



■ ふくしま復興支援オリジナルTシャツ

この夏、本学では、東日本大震災からの復興を願い、「ふくしま復興支援オリジナルTシャツ “Fukushima will…”」を制作・販売しました。

デザインを担当したのは、医学部6年生の豊田喜弘さんです。

Tシャツの前面には、相馬野馬追、鶴ヶ城、三春駒、シーラカンス、キビタキ、吾妻山の雪うさぎ、そして福島特産の桃など、福島にゆかりのあるものを散りばめました。また、背面に施されたQRコードを携帯電話のカメラで読み込むことで、福島県応援サイト「がんばる福島」へアクセスできるようになっています。

このTシャツは、大学病院内の売店をはじめ、同窓会事務局のホームページなどを通じて11月末まで販売しました。本学の学生や教職員のみならず、全国の多くの皆様から注文をいただき、最終的には目標の約1,500枚を売り上げることができました。去る12月26日に豊田さん、医学部八木沼教授が県庁を訪問し、Tシャツの収益金の64万2,791円を義援金として手渡してまいりました。

ご支援、ご協力をいただきました皆様に心より感謝を申し上げます。



■ 震災後の支援に対するお礼

平成23年3月11日に発生しました東日本大震災に際しましては、本学に対し、国内・外の多くの皆さまから、激励のお言葉や支援物資・義援金によりご支援をいただきました。

いただきました義援金につきましては、本学の教育・研究環境や附属病院機能の復旧など、本学の復興のため、大切に使用させていただきます。

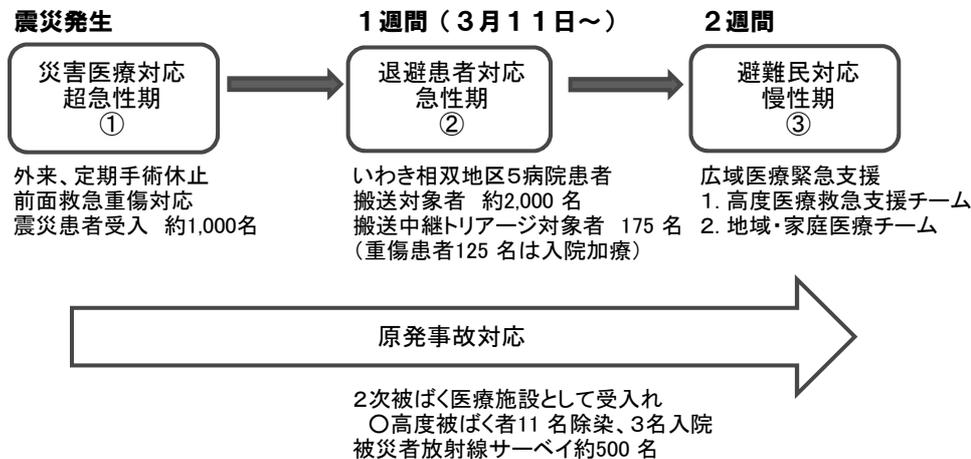
本県において、大気中、水道水、農林水産物の放射能について、日々モニタリング検査を実施し、安全を確認しながら、事故以前の状態への復旧に全力を挙げております。

その中で本学は今、県民健康管理調査事業の実施をはじめ、放射線医学の教育・研究・医療体制の整備など、県民をはじめ国民の健康保持・増進に向けた福島県の新たな取り組みの中核に位置付けられております。これから長く、そして厳しい闘いになりますが、本学はこの歴史的使命を確実に果たしていく覚悟でおります。

紙面をお借りいたしまして、多くの御協力と御厚情に対し心より深くお礼申し上げます。

今後とも御支援のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 震災後の本学の活動（災害医療支援機関としての動き）



【超急性期】①

一般外来及び定期手術を全面停止とし、地震・津波による傷病者救急医療に特化し

【急性期】②

3月11日深夜から3月15日までの福島第一原発周囲地域の断続的避難命令に伴い、放射能スクリーニングを行いつつ、中継、入院、及び後方転送を行いました。

【慢性期】③

原発周囲20kmは避難区域に、20～30kmは避難準備地域になり、残留住民に対する巡回医療を自衛隊、長崎大学等と協力して行いました。また、30km圏外の避難住民に対しては、全県の高度医療支援において、「こころのケア・チーム」・「エコノミークラス症候群チーム」・「小児感染制御チーム」が避難所を巡回訪問しました。

編集発行 公立大学法人福島県立医科大学
事務局企画財務課

〒960-1295 福島県福島市光が丘1番地

TEL 024 (547) 1013 FAX 024 (547) 1991